

## 5 モデルとなる推進校の取組からの考察

### (1) 大規模市町村の近郊にある学校における地学協働モデル（当別高校の実践から）

#### ①高校の状況

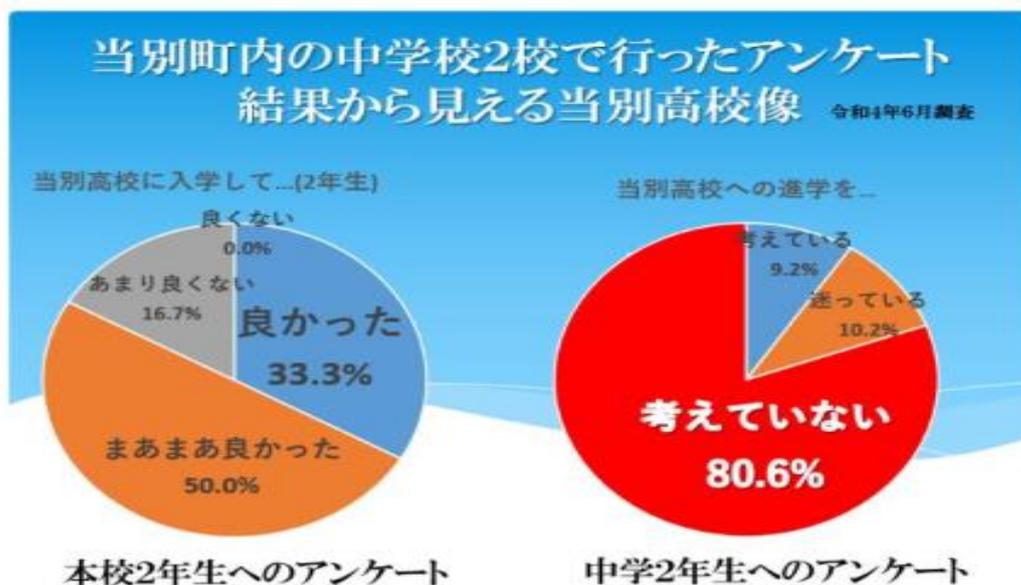
当別高校は、昭和 24 年に開校し、卒業生約 1 万人を輩出している伝統校であり、「普通科」「園芸デザイン科」「家政科」の全日制 3 学科を有する学校である。札幌近郊の当別町（人口 15,329 人＜令和 5 年 1 月 31 日現在＞）に立地している唯一の高校で、札幌駅から JR により約 1 時間で通学できるため、札幌市から通学する生徒が多く、約 8 割は町外からの通学となっている。

このような大都市近郊に立地している高校では、地元の優秀な生徒は、大都市の高校を選択し、当該高校には大都市から生徒が通学する状況になっていることも多く、当別高校もそのような傾向にあると言える。下記アンケート結果のとおり、町内の中学生は、当別高校への進学希望が少ないことから、学校の魅力を地域に伝え、学校への理解を深めてもらうことが必要である。

役場や教育委員会も地域における高校の価値を感じているものの、財政的に厳しい状況もあり、高校への財政支援が難しい状況もある。当別町には、私学の「北海道医療大学」（令和 5 年 9 月末に大学が町外に移転することが報道された。令和 10 年に移転予定）がキャンパスを構えており、多くの大学生が町内に住む状況にあることから、経済的にも地域づくり的にも、大学との関係を重視している。このような状況から、多くの 1 市町村に 1 校の高校に比べて、行政・地域の高校への理解が進んでおらず、連携・協働を進めることで、高校の存在意義を高めることが必要である。

当別高校の場合は、卒業生が有力者として町内に残っていて、高校のことを気にかけており、そうした方々を中心に支援を得られる可能性は高い状況にある。

本事業実施に当たって、学校（管理職）は、当別高校（の存続）のためには、地元の理解を深めることが必要だという思いをもっており、「地学協働」が一つの解決の方向性になるであろうという期待もっていた。本事業への管理職の姿勢は大変前向きで、「これこそ、本校に必要なこと」との認識を持っていたが、すでに園芸デザイン科・家政科では、地域との活動を進めているところであり、本プロジェクトを取り入れなくても地学協働を自分たちで実施していると主張する教職員の理解を得ることは難しく、体制づくりや活動がなかなか進まない現状もあった。



（令和 4 年度北海道 CLASS プロジェクトフォーラム 北海道当別高校）



地域学校協働活動をとおして、地域課題を探究したり、地域の大人と接したりすることでこれらの変容が期待できることから、探究テーマに沿った地域人材・資源とのつながりができることが重要である。そのためには、地域 Co が探究を理解し、地域とのつながりづくりを進めることと、目的を見据えた活動を進めるための体制づくりやカリキュラムへの位置付け等が必要であり、当別高校では事業開始当初、次のように、1年ごとの目標を立て、段階的に進めていくこととした。

月	取組
1年次 (R3)	<p>(目標)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1学年の中で「総合的な探究の時間」の先行実施</li> <li>・「総合的な探究の時間」のカリキュラムの策定</li> <li>・コンソーシアムを立ち上げ</li> </ul> <p>(主な取組)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域コーディネーターと取組内容を検討、協議する</li> <li>・校内委員会を中心に内容を検討し実施する</li> <li>・職員会議において進捗状況を確認する</li> <li>・月1回のプロジェクト推進会議を行う</li> </ul> <p>(検証の項目) ※定量及び定性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員の満足度80%以上のカリキュラム作成</li> <li>・今年度の取組に対する生徒の意識調査の満足度80%以上</li> <li>・取組へ保護者からの理解と期待が高まる</li> <li>・取組へ地域（学校関係者、中学校等）から理解と期待が高まる</li> </ul>
2年次 (R4)	<p>(目標)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「総合的な探究の時間」の本格実施</li> <li>・コーディネーター機能の活用による地域教育資源の積極活用</li> </ul> <p>(主な取組)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「総合的な探究の時間」を計画どおり実施</li> <li>・地域コーディネーター、教員のサポートにより生徒の個別のテーマに沿った学習の推進</li> </ul> <p>(検証の項目) ※定量及び定性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度の取組に対する生徒の意識調査の満足度85%以上</li> <li>・取組へ地域（学校関係者、中学校等）から理解が深まる</li> </ul>
3年次 (R5)	<p>(目標)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・当別町との連携、協働体制の確立</li> <li>・生徒の学習成果の発表</li> </ul> <p>(主な取組)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の様々な機関との連携、協働した取組を実施する</li> <li>・生徒の成果発表を校内、校外で実施する</li> </ul> <p>(検証の項目) ※定量及び定性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度の取組に対する生徒の意識調査の満足度90%以上</li> <li>・取組へ地域（学校関係者、中学校等）から協力体制ができる</li> </ul>

(令和3年度北海道 CLASS プロジェクト実施計画書 北海道当別高校)

スタート当初の計画としては、3年間で Co 機能を活用して地域探究をカリキュラムに位置付け、町を含めた地域との連携・協働体制の構築を進め、地域の探究が形になる状況を目指していた。計画は、状況に応じて柔軟に変更していくべきものなので、2年次、3年次には目標等が当初予定と変わっている。詳細は、資料編の計画書・報告書を確認していただきたい。

### ③推進体制

上記の目標達成のための推進体制としては、本事業で必須としている (ア)「地域コーディネーター」 と (イ)「コンソーシアム」 について、(ウ) 学校の体制 はどうかの3点で見ていくことにする。

#### (ア) 地域コーディネーター

当別高校での本事業の地域 Co の選出については、高校が想定している活動から、「当別町内の青年世代で地域活動に積極的に取り組んでいる人」「当別町内の関係各所につながりがある人」を視点に、町教育委員会の社会教育主事に相談し人選を進めた。学校、町教育委員会社会教育主事、教育局で協議の上、候補者を決定し、学校長から候補者に説明して了解を得た。

当別高校の地域 Co は、町出身者で当別青年会議所の役員でもある松岡 Co が担うことになった。松岡 Co は、様々なまちづくり活動に関わっている実績があり、商工会役員でもあるため、多様な地域の方とつながりがある。自らも大学院に通って経営を学んでいるアクティブな方で、地域の多様な人材と学校の活動をつなげるには、まさに適任であった。

地域 Co 受託の経緯について、松岡 Co は、変革への意識を挙げている。地域の高校ではあるものの、学校の状況や地域の認知度を考えたとき、自分が関わって高校を変革していく必要があるという意識が強かった。まちづくりに主体的に関わっている松岡 Co には、まちづくりへの「当事者意識」があると考えられる。

松岡 Co への聞き取りでは、コンソーシアム等の他者にいかに「当事者意識」を持たせ、高めていくのが重要だと答えている。そして、当事者意識を育むポイントは、「直接的な関わり」と「問題と課題」、「相手が役に立てる具体的な要望(手段)」を挙げている。まちづくりの経験から、他者を巻き込むポイントを整理し、活動に活かすことで当別高校における Co 業務を推進していることがわかる。このことから、地域 Co の選出に当たって、活動への当事者意識や経験を持ち、フットワークが軽い人が Co 機能を果たす重要な要素であることがわかる。

学校内では1年目から職員室に席を設け、教職員とのコミュニケーションや相談ができやすい状況をつくったものの、地域 Co が年度途中から学校に入っていくことは、ハードルが高いものである。ましてや、本事業への教職員の理解が十分ではない状況下で学校に入っていくのは、難しさもあっただろうと推察できる。

また、本事業による地域 Co の配置は、3年間であることから、「事業終了後の地域 Co をどうするのか」という課題がある。予算付けがない中で、どのように Co 機能を維持するのかは、プロジェクト開始当初からある大きな課題の一つである。

松岡 Co についても同様の課題が残されたままだが、松岡 Co 自身は、ボランティアでも関わりたいとの意欲を持っている。まちの活性化への使命感と、「地学協働の魔力」であるが、活動に関わり、生徒の変容や地域の活性化を目の当たりにすると、その関わりの意義や使命感、楽しさを感じ、「もっとやりたい」という気持ちが出てくるのであろう。とはいえ、地域 Co の業務は、ボランティアで担える業務量ではないため、松岡 Co の使命感に甘えることになると、いずれ「負担感」が出てきて終了してしま

う恐れもある。持続可能な Co 機能の維持を目指すのであれば、何らかの方法で地域 Co を位置付けていく必要がある。

#### （イ）コンソーシアム

具体的な地域学校協働活動の想定ができていたこともあり、その実現に関わるコンソーシアムの構成員については、自ずと決まってきたところもあった。学校長と地域 Co が中心に、学校評議員等を軸に構成員を選出した。

コンソーシアムについては、初年度に立ち上げの会議を 1 回、2 年目には 2 回、3 年目には 7 回程度の会議を開催している。

構成員の尽力で、地元企業のインターンシップや企業説明会等が実現し、高校で育成した人材が地元就職しやすくする仕組み作りを進めることができた。

ハード面の大きな課題として、食品加工ができる設備が高校にないため、商品開発等の活動できない状況があったが、高校生が使える加工施設について、町・振興局等との連携により、町内に商品開発が可能となる加工施設を建てていくための協議も行われた。

こうした施設整備などの大きな課題に対しても、地域の有力者が参画しているコンソーシアムがあれば、実現に向けた協議を進めることができるのは、地学協働の大きな意義であろう。町にとっても、民間の意見を入れながら、新たな活動環境を整備することは、まちづくりの視点で重要な取組になると考えられる。

3 年目には会議の回数が大きく増えている。これは、次年度以降のコミュニティ・スクール立ち上げの準備を行い、本プロジェクト終了後の持続可能な体制構築を進めることと、「粘議場（ネバギバ）」を実施したことによる。

この「ネバギバ」が当別高校の「生徒」「地域」の主体性を育む特徴的な装置だ。ネバギバは、コンソーシアム構成員などの地域協力者に集まってもらい、その場で生徒が自分の探究についてプレゼンし、協力をお願いするというものだ。例えば、「食品ロスを減らすには」という探究テーマを設定した生徒が、「ゴミになった食品の行方」を動画にして、食品ロスについての交流イベントで放映する企画をしていて、コンソーシアム構成員に人脈を活かして「イベントの周知に協力してほしい」というお願いをするといったもので、構成員も生徒の企画を考え、伴走者としてより深く活動に関わることになる。

ネバギバの実施により、地域の協力者に生徒自身が協力をお願いをするという、生徒にちょっとした「試練」を与えることで生徒のプレゼン力を鍛えるほか、生徒自身の探究への思いを深くする効果が期待できる。また、探究の途中で、生徒がやろうとしていることに対して、地域の協力者からその甘さを指摘されたり、具体的な助言をもらえたり、大人目線での評価をショートスパンでもらえるなど、様々な教育効果が詰まっている場となる。

同時に、地域の協力者にとっても直接的に高校生が依頼をしてくる場となるため、活動への協力意識が高まると思われる。ネバギバには、高校生が本気でお願いしてくることで、地域の大人も本気になってくる、つまり、お互いの当事者意識を高める機能があるのだ。

こうした機能をコンソーシアム構成員が果たすことで、外部人材が評論家的な意見を述べて終わるといふ、関係者の「当事者意識」が育たないコンソーシアム会議には、ならない仕組み作りができていく。コンソーシアムのひとつの持ち方として、コンソーシアム自体を「形骸化させない・活性化させていく」という意味でも参考になる事例だろう。

### （ウ）学校の体制

学校では、前述のとおり、本事業に関する意識として、管理職は積極的に推進していこうという姿勢があったが、教職員の理解がなかなか得られない状況があった。変化の激しいこの時代に社会の創り手となる生徒を育成していく高校では、時代の変化に対応するための資質・能力を育成する授業改善が重要なのは明らかで、そのために「探究」をとおして、地域社会で主体的な学びをすることが一つの改革となるのだが、当別高校では事業当初から、教職員の理解を得られないという難しい状況があった。

こうした状況について管理職は、地域 Co に学校文化も含め理解してもらうことが重要と考え、職員室に地域 Co の席を設け、なるべく学校にいてもらい、教職員とのコミュニケーションを図ってもらうこととした。教職員の中には、「生徒は札幌から来ているんだから、地域との連携はいらない」と言う人もおり、活動を進めていく前段階として、地学協働の意義などについて学校内の基本的な理解を得る必要があった。

初期の段階として、学校内・地域 Co の理解を促進しながら、具体的な活動を含めた動きについて考えながら進めていくことも必要である。そのために、町教育委員会の社会教育主事等の関係者による「プロジェクト推進会議」をほぼ毎月実施し、コンソーシアムの設置や総合的な探究の時間の取組について決めることができた。

園芸デザイン科と家政科では、すでに地域と連携した活動を取り入れていることから、こうした連携に本事業の地域 Co による連携がプラスされることで様々な連携先との協働により、生徒が主体となって課題発見から解決までのプロセスを体験できる仕組み作りが可能になるチャンスでもあったが、両科の教職員の意識は、現行の連携で十分というもので、活動の改革とはならなかった。

一方、普通科には本事業 2 年目に古谷教諭が赴任してきた。前任校の経験から、古谷教諭が探究について「自分にやらせてほしい」と前向きに関わる様子があった。古谷教諭は、自分自身も大学院で学んでいる最中でもあり、そうした教職員の学びへの姿勢も生徒に好影響を与える材料となっていた。

こうした状況から、3 年目には、園芸デザイン科と家政科は本プロジェクトから離れ、普通科での探究に的を絞って実施していくこととして、普通科の各学年 2 名で構成するプロジェクトチームを立ち上げた。探究に主体的に関わる古谷教諭を中心に地学協働に係る学校体制ができてきた。このことにより、実際に関わる教職員が当事者意識を持って活動する基盤ができた。

教職員の協力が得られるようになったきっかけの一つとして、古谷教諭の熱心な活動があげられる。古谷教諭は、教科・探究・生徒会と多岐にわたる業務を担当しており、その多忙な状況下にある古谷教諭に頼まれると、同僚の教職員も拒否しにくいところもあるだろう。さらに、3 年目には学校のトップである校長が公募校長に変わっており、働き方改革などでも成果を出していた。校長のリーダーシップや意欲的な担当教諭、前述の松岡 Co の関わりと、キーパーソンによる変革のエネルギーが徐々に教職員の意識改革を促したとも考えられる。

教職員の意識の変容は、こうした体制の変化やキーパーソンの熱量もあるが、実際に探究が一部の教職員だけの取組でなく、関わる教職員が当事者として活動できたことが重要である。

意欲的な担当教諭により、前向きな地学協働に係る学校体制づくりが進んでいるが、将来的な教職員の異動も見据え、一担当に委ねるのではなく組織として位置付けていくことが重要である。地域 Co (つなぐ Co 機能)、コンソーシアム (地学協働体制)、学校体制の三位一体の整備が持続可能な体制づくりとして重要だと考えられる。

④活動

前述の紆余曲折を経て、令和5年度は、普通科の総合的な探究の時間で具体的な活動を進めていくことになった。各学年の目標は、次のとおりである。

**各学年の目標**

**1 学年**

地域を知る学習・活動から当別町の歴史や伝統文化、地域の課題について興味・関心を持ち、魅力を見つけ、今、自分たちにできることを考え課題を設定する。

**【具体例】**

- ・現代の当別町・地域、歴史や伝統文化への興味・関心を高める機会を創出する。
- ・地域の企業・団体の方々とキャリアについて考える機会を創出する。

**2 学年**

地域の方々、生徒同士との協働において、自分の役割を見つけ、自己と他者への理解を深め協働的に取り組む資質・能力を育成する。地域や社会との関わりから課題解決に向けて情報を集め、整理・分析してまとめたり、発見した当別町の魅力を効果的に伝える。

**【具体例】**

- ・1学年で学んだ当別町の魅力等を土台に、課題解決策を探究し発信する機会を創出する。
- ・地域の企業を訪問することで、キャリア意識を高める場を設定する。

**3 学年**

地域社会の将来について理解を深め、地域の一員として、自分たちにできることを考え、主体的に行動することができる。自ら選択した課題解決に向けて情報を集め、整理・分析してまとめ発表できるようになる。

**【具体例】**

- ・2年間で学んだ知識・技能を活用し、よりよい地域社会の実現に向けて課題を設定し、解決策をまとめ、相手や意図に応じて表現し発表する機会を創出する。

1 学年では、「当別町を知る」ための活動として、当別町の歴史と今について、当別神社の宮司や役場職員からレクチャーを受け、基礎的な理解を共有するとともに、「地域課題」について、町内企業の若手リーダーから話を聞いたり、古谷先生の大学院での先生でもある北大の山中教授から SDGs について話を聞いたりして、今後の「探究」に向けた理解を深めた。

また、令和4年度には、地域の伝統芸能「すずめ踊り」を体験するなど、体験的に地域の文化に触れる活動も行った。

「当別町の魅力を探す」ための活動として、フィールドワークも実施している。フィールドワークは、地域社会に体験的に触れ、そこで活動している「大人」とのふれあいで「社会で働く」ということを肌で感じながら、課題を知ることができる重要な活動である。

フィールドワークについては、地域 Co がコースを設定し、生徒の興味により選択する形で決定しており、生徒の主体的な学びを大切にしている。

実際に、地域 Co が地域資源、課題を考えながら、人脈を駆使して6つのコースを設定していたが、生徒の興味から「先進スマート農業見学コース」は希望者0のため設定されないこととなった。農業は、当別町にとって重要な産業であり、地域課題を考える上で大切な視点であるが、主体的な探究を進める上でテーマとして選択されないということもあり得る。生徒の興味に基づいた主体的な活動にしていくことが生徒の探究へのモチベーションを高め、学習の質を向上させることにつながるため、非常に重要なプロセスである。



↑ R4 地域企業の若手リーダーとの対話

<令和4年度の設定コースと生徒の人数>

1	先進スマート農業見学コース	0名
2	とうべつ物産品学びコース	17名
3	開拓精神を学ぶ歴史見学コース	9名
4	未来をつくる教育を学ぶコース	9名
5	国王も来町したことがある!スウェーデンコース	19名
6	とうべつ商店街コース	8名

2学年では、1学年での活動により設定した課題を解決するために具体的な探究を行っている。この活動では、地域の方々や生徒同士の協働的な取組を大切にし、人や社会との関わりから課題解決に向けた探究を進めていく。町の魅力をどのように発信していくかを考え、実践していくことで、体験的に社会活動についての学びを深めていく。

3学年では、3年間の探究のまとめとなる発表を校内・校外で行い、生徒のプレゼンテーションスキルの向上と高校の活動を校外にも発信し、高校への理解を深める活動を進めている。

また、キャリア教育の観点から「キャリアクエストタイム」として、進路実現に向けた活動を実施している。地域の企業・団体の方に来校していただき、10グループ程度に分かれて「働くこと」について話を聞き、その後生徒が直接企業を訪問し、実際の働く現場を見学することで、「働く」ということについて、実感をもって理解することができる。

これらの活動により、地域の企業が高校生の様子を見ることができるようで、企業から当別高校の生徒を採用したいとの声が聞かれるようになった。町の企業に採用される生徒が増えてくれば、町内に卒業生が定着することになり、地域の高校への理解が深まるとともに、地域における高校の魅力化が進むと考えられる。このことは、地域学校協働活動により「高校の魅力化」「地域での存在意義の向上」などが図られる可能性を示唆している。



←福祉施設でのフィールドワーク

⑤変容

高校から3年間の活動とその影響を時系列でまとめたものを以下のとおり示していただいたので、それに基づき考察する。

時系列での活動一覧

<p>変容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新たなプロジェクトを前向きに受け入れる<b>教員</b>は、極めて少なかったため、町の歴史等できることから始めた。</li> <li>・<b>地域コーディネーター</b>に各教科の授業への参加をはじめ、学校の現状を知ってもらう場を多く設定した。</li> <li>・初年度の担当学年で<b>地域と連携</b>して実施できた内容がわずかであったため、<b>地域への意識</b>が高まらなかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新たなプロジェクトを前向きに受け入れて業務に携わる<b>教員</b>が増えてきたためフィールドワークを始めた。</li> <li>・<b>地域コーディネーター</b>が、コンソーシアム、カリキュラム編成のため地域人材の活用を後押ししてくれた。</li> <li>・年度初めから、地域と連携した取組を実施することができたことから1年生の、<b>地域への意識</b>が高まった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普通科「総合的な探究」の時間に移行したことで、普通科の<b>教員</b>は自分事として取り組むようになった。</li> <li>・<b>地域コーディネーター</b>と<b>当別探究プロジェクトチーム</b>が前年の課題を踏まえ「<b>当別探究活動</b>」を確立した。</li> <li>・地域との連携が深まり、生徒の主体的な動きを支援する体制が整ったことで、<b>地域への意識</b>が格段に向上した。</li> </ul>
<p>活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・石狩教育局が、毎月、<b>プロジェクト推進会議</b>を開催してくれたことで、校内での<b>事業推進</b>を後押ししてくれた。</li> <li>・総合的な探究の時間を<b>使う</b>で「地域理解」「キャリア教育」の取組を実施した。</li> <li>・<b>実行錯誤</b>を繰り返し、取り組めるところから先行実施することができたが、多くの課題が残った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コンソーシアムと<b>プロジェクト会議</b>を開催したことで「<b>郷土学習</b>」等具体的な内容が<b>実施</b>されるようになった。</li> <li>・1、2年生で「地域理解」「キャリア教育」に加えてグループごとに「<b>フィールドワーク</b>」を実施した。</li> <li>・3科全体で学年ごとの取組を推進したことで、学年ごとの<b>連帯</b>ができた。次年度に向けた計画が完成した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当別探究プロジェクトチームが主体となって、地域コーディネーターと連携して探究活動が<b>実施</b>できた。</li> <li>・3年間を見通したカリキュラムを編成し、<b>生徒が主体</b>となった取組を各学年で実施できた。</li> <li>・当別探究プロジェクトチームが主体となって、計画、実施することで、生徒が主体的に<b>取組める</b>ようになった。</li> </ul>
<p>体制構築</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・校内<b>プロジェクト会議</b>（教頭、教務部長、学年主任、普通科、園芸デザイン科、家政科 6名）</li> <li>・<b>プロジェクト推進会議</b>（年9回実施）石狩教育局の社会教育指導班がサポート</li> <li>・<b>コンソーシアム</b>8名（事務局、オブザーバー各4名）</li> <li>・<b>地域コーディネーター</b>配置 青年実業家リーダー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>課題解決委員会</b>（教頭、総務部長、教務、普通科、生徒指導部、園芸デザイン科、家政科 7名）</li> <li>・<b>プロジェクト会議</b>（年5回実施）石狩教育局の社会教育指導班がサポート</li> <li>・<b>コンソーシアム</b>8名（事務局、オブザーバー各4名）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>当別探究プロジェクトチーム</b>（普通科教員6名）</li> <li>・<b>コンソーシアム</b>で町の企業、団体の方々に生徒と課題を共有して<b>解決</b>策を考える場の設定</li> <li>・<b>粘着場</b>（ネバギバ）で生徒が自分の企画を<b>コンソーシアム</b>でプレゼンし、協力を求める場の設定</li> <li>・商工会議所と連携・協力協定書の締結</li> </ul>

（令和5年度 北海道当別高校）

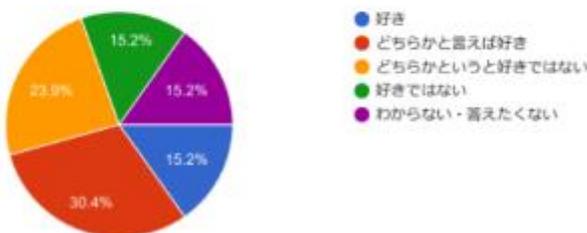
- ・推進体制上、課題であった「**教員の意識**」が「**体制構築**」と「**業務・活動の関わり**」をとおして、前向きに変わってきている。当事者意識の醸成。
- ・カリキュラム・体制の整備（校内プロジェクト・地域 Co の配置）により、生徒が主体的に取り組める活動が展開できるようになった。
- ・地域 Co・教育局等の関わりが体制構築・活動推進の後押しとなった。
- ・学校教員のプロジェクトチームと地域 Co が連携し、高校の探究を確立できた。
- ・生徒の地域への意識は、活動の充実とともに高まった。

また、地域活動について、地域学校協働活動実施後の生徒にアンケートをとっている。実施後に実施前の自分を振り返って比較してもらった。質問の1と3は、「地域についての愛着」、2と4は、「地域活動への参画意識」について聞いたもので、結果は、以下のとおりとなっている。

< 1 は地域学校協働活動実施前、3 は地域学校協働活動実施後の地域への愛着について >

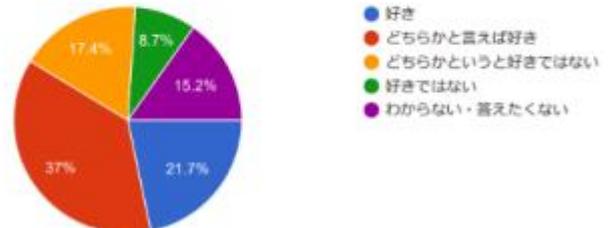
1 みなさんの地域への愛着について聞きます。みなさんは、総合的な探究の時間等において、地域の方と**関わる前**は、地域や社会に対してどのように感じていましたか。一番当てはまるものを選んでください。

46 件の回答



3 みなさんの地域への愛着について聞きます。みなさんは、総合的な探究の時間等において、地域の方と**関わってから**は、地域や社会に対してどのように感じていますか。一番当てはまるものを選んでください。

46 件の回答

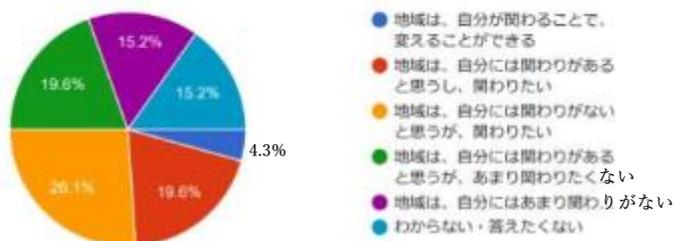


「好き」「どちらかと言えば好き」を合わせると、  
 (事業前) 45.6% (21人) → (事業後) 58.7% (27人)  
 となり、地域に愛着をもつ生徒は増えている。

< 2 は地域学校協働活動実施前、4 は地域学校協働活動実施後の地域活動への参画意識について >

2 みなさんの地域活動への参画意識について聞きます。みなさんは、総合的な探究の時間等において、地域の方と**関わる前は**、地域や社会に対してどのように考えていましたか。一番当てはまるものを選んでください。

46件の回答



4 みなさんの地域活動への参画意識について聞きます。みなさんは、総合的な探究の時間等において、地域の方と**関わってからは**、地域や社会に対してどのように考えていましたか。一番当てはまるものを選んでください。

46件の回答



「地域は自分が関わることで変えることができる」と答えた生徒は、  
 (事業前) 4.3% (2人) → (事業後) 13% (6人)  
 「地域が自分に関わりがあるかないかは別にして、地域に関わりたい」と答えた生徒は、  
 (事業前) 45.6% (21人) → (事業後) 50% (23人)  
 となり、地域関わることで地域を変えられる、地域に関わりをもちたい、と考える生徒は増えている。

< 総合的な探究の時間をとおして、どのような点が成長したと思うか。(複数回答) > (回答数 46)

1 社会の仕組みについて知ることができた	17
2 調べたことを使う力が身についた	15
8 他の人の意見を尊重できた	15
3 探究することの意味を理解できた	12
6 集めた情報を整理することができた	12
7 集めた情報をまとめたり、表現することができた	9
4 課題を見つけることができた	8
11 自分の生き方と社会の関係について考えた	8
5 課題解決のための情報を集めることができた	7
10 課題解決のために、他の人と協力できた	7
9 自分から課題解決に努力できた	6
12 よりよい社会づくりに貢献したいと思った	6
13 わからない・答えたくない	8

< 総合的な探究の時間をとおして成長したきっかけは何だと思えますか (自由記述) から一部抜粋 >

- 人との関わり
- 地域と少しでも関わったから
- 自主的に物事に取り組むようになったからだと思えます。

○地域の人がどんな活動をしているか、どのような人でどのような生活をしているかなどが分かり、どんなことをしていても同じ人間なんだと思ったのと、同じ人間ができることのすごさに驚きました。

（令和5年度 北海道当別高校 生徒へのアンケート調査）

#### アンケートからの考察

- ・生徒自身が、地域に関する探究をとおして、人や地域と関わり、地域への愛着、地域社会への参画意識を高めることができた。
- ・地域の人との関わりが、生徒の地域社会への理解を深めることにつながった。
- ・成長した点として、「社会の仕組みについて知ることができた」の回答が一番多く、今後社会に出る高校生にとって、社会に出る上で重要な準備となる学びがあったと言える。

#### ⑥3年間のまとめ

##### <成果>

- ・地域 Co は、まちづくりに「当事者意識」をもった実践者
- ・地域 Co の人選には、町教育委員会の社会教育主事に相談
- ・生徒の探究企画をコンソーシアム委員にプレゼンして協力を得る「ネバギバ」がコンソーシアムの活用方法の一つとして有用
- ・教職員の地学協働への拒否反応があったが、地域学校協働活動の実施・生徒の成長の実感、熱意のある担当教諭による働きかけ、社会に開かれた教育課程の実現についての理解促進、地域 Co の積極的関わり、「総合的な探究の時間」として位置付けたこと等により、主体的な関わりに転換
- ・校長・担当教諭・地域 Co の熱量が活動を推進
- ・学校内プロジェクトと地域 Co により、高校の探究が確立
- ・まちを知る・フィールドワーク等で地域の人との関わりが生徒の地域への愛着や社会への参画意識を向上
- ・実践の継続により、生徒が目指すべきモデルケースができてきた
- ・評価の作成
- ・教員間の協力体制が構築
- ・地域との連携へのハードルが下がった（教員の意識・地域人材とのつながり）
- ・地域と生徒がダイレクトにつながる場を生み出すことができた
- ・当別町商工会と連携協定を結ぶなど、つながりを強化・継続する仕組みができた

##### <課題>

- ・地域 Co への予算は課題
- ・実践の活用・検証
- ・教員の探究活動に対するスキルアップ
- ・探究的な学びに係る業務の増大と従来業務とのバランスをどう図っていくか

#### ⑦資料（資料編に掲載）

- 当 1 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（1年次）《第1次》
- 当 2 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（1年次）《第2次》
- 当 3 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施報告書（1年次）

- 当 4 令和4年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（2年次）
- 当 5 令和4年度 北海道 CLASS プロジェクト実施成果報告書（2年次）
- 当 6 令和5年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（3年次）
- 当 7 「当別探究」実施計画
- 当 8 コンソーシアム規約・目標
- 当 9 全道地学協働活動研究大会発表資料
- 当 10 令和5年度 北海道 CLASS プロジェクト実施成果報告書（3年次）